



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報

第 21 号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2023 年 3 月 24 日

〒980-8576 仙台市青葉区川内 4-1 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL <int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp>

新・同窓会会長 挨拶

江藤 裕之

(国際文化研究科同窓会会長・言語科学研究講座教授)

国際文化研究科同窓会会員の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

2023 (令和 5) 年 4 月より、高橋大厚先生の後を継いで、国際文化研究科長を務めることになりました江藤裕之と申します。あわせて、国際文化研究科同窓会会長の任も引き継ぎました。不慣れな点も多々あることと思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本年 4 月、国際文化研究科は創設 30 周年を迎えます。研究科では、昨年より 30 周年記念事業準備・実施委員会を立ち上げ、記念行事を検討してきました。まずは、同窓会の名簿を整理し、同窓会会員の皆さまが今、どこで活躍なさっているかをしっかりと把握し、今後の同窓会ネットワーク構築の基礎資料にしたいと考えています。

記念行事は、本来であれば 30 周年にあたる本年に行うべきではありますが、今年は、年来の念願であった研究科西棟の改修工事が行われることになり、それにともなう諸手続きや引越しなどで関係者にはとても慌ただしい年になります。そこで、何かとバタバタすることが予想される本年ではなく、新しい研究科棟を同窓会会員の皆さまに紹介できるタイミングで行う方がよいのではないかとこの準備委員会の意向を踏まえ、来年 (2024 年) に開催する予定で調整しています。諸般の事情で、また海外の同窓生の皆さまが少しでも多く参加できることを考慮し、オンラインでの開催を考えております。詳細が決まり次第、ウェブサイト上、また DM にてお知らせいたしますので、皆さまのご参会を心よりお待ちしております。

30 年といえば、「世代 (generation)」が交代する時間の単位です。ひとつの時間の区切りであり、次の新しい何かが生まれる (gen-) 時です。と同時に、「世界 (world)」が変わることでもあります。英語の world や

ドイツ語の Welt は、wer- (人) と alt (年) からできており、文字通りに言えば「人の年」ということになります。「世界」とは空間的な概念のようですが、これらの語の語源から時間的にとらえられていたことがわかります。たしかに、漢字の「世」も「三十」です。

この 30 年で、私たちを取りまく世界には多くの変化がありました。研究科や大学だけでなく、国内外の情勢も大きく変わりました。とくに、この 3 年は、コロナ禍の影響で私たちの生活スタイル、というか生き方そのものにも大きな変化があったように思えます。この変わりようを「凶」と見なすか、あるいは「吉」とするかは私たちの考え次第だとは思いますが、できるだけ、よい方向、つまり、変革のチャンスだとポジティブにとらえていきたいものだと思っています。

ひとつの大きな変化は、IT/ICT の驚くべき発達により、空間を超えたつながりが可能になったということがあります。先日も、本研究科教員が主催する国際ワークショップが開催され、ゲストスピーカーとして海外からはマレーシアとフランスの研究者が招かれていました。そのワークショップはオンラインとオンサイトのハイブリッド開催でしたが、30 年前なら考えられなかったことです。衛星通信を使用するなど高額の経費をかければ不可能ではなかったと思いますが、ここまで簡単に、そして設備にお金をほとんどかける必要もなく数千キロ離れた場所と瞬時につながることは誰が予想しえたでしょうか。まさに、隔世の感ありです。

コロナ禍が始まった 3 年前、授業や会議をオンラインで開催するようにお達しがあり、私たち教員の多くは戸惑いました。試行錯誤の末、何とかオンライン授業やオンライン会議にも慣れてきましたが、そうするとなかなか便利なものだという気づきはじめました。今後は、対面 (オンサイト) と遠隔 (オンライン) のそれぞれの長所を活かした授業や会議、そして研究集会等の運営が可能になり、選択肢の幅が広がったとプラスにとらえています。

もちろん、オンライン集会といったデジタル的な、つまり「点」的な「そこだけ」のイベントよりも、その前後も参加者といろいろな触れ合いのできる「面」的な交流の方がよいと思います。しかし、後者を実現するための経費や労力を考えると、オンライン的な要素を活用していくことで、より効率のよい手段を選ぶことができます。

こういったデジタル化の世の中から後戻りできない今、むしろ、この利点を上手く使いこなせるようになることが重要だと考えております。そして、同窓会の運営、同窓会会員の皆さまとのつながり、こういったことも積極的にデジタル・ネットワークの中で行ってまいりたいと考えています。と同時に、同じ時間と空間を共有し人間的な触れ合いのできる場を可能な限りもてる行事も実施したいと思います。

先にも書きましたように、まずは同窓会会員の名簿の整理を行い、本同窓会には海外在住の会員も多いことから、主要な国や地域の会員をまとめるハブとなるグループを作り、そのグループをつないでいくことで、本研究科同窓会の交流をより充実させ、双方向の交流がこれまで以上に可能となるネットワークの構築を目指してまいります。会意の皆さまには、これまで以上のご協力をお願いする次第でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

第20回、第21回同窓会総会報告

第20回総会を2022年3月9日に、第21回総会を2023年3月8日に、オンラインで開催しました。講演会については、コロナウイルス感染症拡大防止のため、行いませんでした。

第22回同窓会総会のご案内

第22回同窓会総会は、2024年3月に開催予定です。詳細が決定いたしましたら同窓会ホームページ等でご案内いたします。

国際文化研究科同窓会事務局

第28回公開講座

「国際文化基礎講座」の報告

第28回公開講座「国際文化基礎講座」（2022年11月26日（土）にオンラインで開催）では『環境と防災 —SDGsの達成に向けて—』と題して、本研究科の2教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。

プログラム

13:00-14:00
第1 講演 データを活用した災害リスクに強いまちづくり
大窪 和明 (東北大学国際文化研究科 教授)

14:15-15:00
第2 講演 「仙台防災枠組」実現への貢献：私たちにできること
泉 貴子 (東北大学国際文化研究科 准教授)

15:30-16:30
ラウンドテーブル それぞれのテーマについて、講師を交えて歓談をお楽しみください

東北大学大学院国際文化研究科
第28回 公開講座「国際文化基礎講座」

環境と防災

—SDGsの達成に向けて—

2022.11.26 (土) 13:00-16:30

実施形態 オンライン (Zoomにて開催)

対象 どなたでも参加いただけます

参加料 無料

申込方法 詳細・申込はこちらから >>>
東北大学 国際文化研究科 国際文化基礎講座

GSICS TOHOKU UNIVERSITY

東北大学大学院国際文化研究科 教務係
☎ 022-795-7556 <https://www.international.tohoku.ac.jp/>

データを活用した

災害リスクに強いまちづくり

大窪 和明（国際政治経済論講座准教授）

国連の持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）の達成に向けて世界な取り組みが進んでいます。「誰一人取り残さない（leave no one behind）」を基本的な理念とし、開発途上国・先進国を問わない17のSDGsの中には、SDGs 9「産業と技術革新の基盤をつくろう」、SDGs 11「住み続けられるまちづくりを」といった、まちづくりに深く関わる国際目標

も含まれています。特に、SDGs11 の中では、水関連災害などの災害による死者や被災者数、直接的経済損失を削減すること、気候変動の緩和と適応、災害に対するレジリエンスを強化するための総合的政策及び計画の導入・実施の推進がターゲットとして設定されており、災害に強いまちづくりの必要性が世界的に高いことが確認できます。その一方で、2021 年に発表された気候変動に関する政府間パネル（IPCC: Intergovernmental Panel on Climate Change）の第 6 次評価報告書においては、今後も地球温暖化が進むことによって、大雨や洪水の強度が増し、より頻繁になるとも報告されており、災害に強いまちづくりは、より重要となっています。また、現代社会は気候変動だけではなく、人口減少や社会インフラの老朽化、感染症の流行といった様々な課題に直面しています。こうした課題の解決に取り組むためには、現状や問題点を効率的に把握し、より良い判断や政策を考えていく必要があります。今回の講演では、こうした課題解決に向けて、データを活用した災害に強いまちづくり、特に道路や公共施設といった社会インフラのマネジメントに関わる研究を紹介しました。具体的にはデータ活用場面として、a)問題点を見つける、b)判断を助ける、c)代替案を考える、といった3つの場面を想定し、それぞれに関する研究を紹介しました。

はじめに、a)データを使用して問題点を見つけるための取り組みとして、道路舗装の劣化が進みやすい道路が集中している区間を明らかにした研究を紹介しました。こうした地理空間情報を使用した方法は、古くは 19 世紀のロンドンにおけるコレラの大流行時に、John Snow が患者数と水道ポンプの位置を地図上に表し、コレラの感染経路を明らかにした取り組みにまで遡ることができます。John Snow は、この地図を用いることによって、コレラの感染経路が、当時、多くの人々に信じられていたような空気を通じた感染ではなく、水を通じて感染することを示しました。最近では、問題が集中している地域を地図上で見つけるための定量化や統計的検定を体系的に行う方法が開発されています。私達の研究では、こうした方法を用いることによって道路舗装の劣化が進みやすい道路区間が集中しているホットスポットを明らかにしました。さらに、地盤の強度や盛土・切土といった構造物の条件によって、この結果が解釈可能であることもわかり、今後の道路舗装の維持管理を考える上で有用な示唆を与えられたと期待しています。

b)判断を助けるための方法としては、予測やパターン認識を得意とする機械学習を、老朽化した公共施設のマネジメントに応用した研究を紹介しました。日本は、高度経済成長期に多くの社会インフラが建設されたため、近い将来、老朽化した構造物の維持管理、運用の継続または廃止の判断が必要になると考えられています。公共施

設の建物についても例外ではなく、建物の壁や柱のコンクリートの状態、その中の鉄筋腐食度といった健全度を調査し、その建物が継続して安全に使用できるか、否かの判断を検討する必要があります。こうした判断は、一級建築士など専門家による判断が必要となりますが、全国の公共施設の数に比べて専門家の数は少ないため、建物の健全度の調査結果があれば、その結果を基に修繕の必要性を判断することができる判定フローを作成することが望ましいと考えました。私達は、建物に関する健全度の調査結果と専門家の判断を学習データとして、機械学習の手法の一つである決定木を応用することによって、データに基づく判定フローを作成することを考えました。このとき、「実際には建物が危険であるにも関わらず判定フローでは安全と判断されてしまう誤判別」と、「実際には建物が安全であるにも変わらず判定フローでは危険と判断されてしまう誤判別」という2つの誤判別の内、前者の発生を避けた判定フローを作成する方法を開発し、その効果を確認しました。

最後に、自然災害に対してレジリエントなまちづくりを考える上では、災害リスクの低減を目指した土地利用計画が必要となります。しかし、土地利用計画が多くの関係者（行政や地域住民など）に関わるものであり、さらには災害リスクの低減以外にも日常生活の利便性といった多くの評価軸や選択肢があるため、関係者の意見を一つの計画としてまとめるには多くのコストが伴います。こうした意見をまとめる際に、私達は、土地利用計画の具体的なイメージ、特に、複数の評価軸の間のトレードオフ構造を、関係者が共通認識として持つことが重要であると考えました。私達の研究では、災害リスク、日常の交通費用、インフラの維持管理費といった複数の評価軸について、どの評価軸を重視するか、を設定することにより、その設定の下で望ましい土地利用計画を効率的に求める方法を開発しました。この方法を実際の地域のデータを使用して解析した結果、災害リスクを低減させると、交通費用やインフラの維持管理費が増加する関係性があり、それは、どのような土地利用となっているか、を具体的に示すことができました。

今回の講演では、データを活用して、より良い意思決定を目指すための方法に関する研究を紹介しました。こうした方法は、利用できるデータや観測技術、計算技術・環境だけでなく、社会のニーズとともに今後も発展していくと考えられます。現在、気候変動に伴う洪水リスクの変化に適応した意思決定を支援する方法の開発にも取り組んでおり、今後も社会的課題の解決に貢献できるように学術的研究を行っていきたいと考えております。

2022年 ピアサポーター活動報告

東北大学では、コロナ下の学生支援制度の1つとして「学生ピアサポーター制度」を実施しました。

これは、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、学生が登校やアルバイトが制限される中でも安心して学生生活を送れるよう、在学生在がピアサポーターとしてオンラインにより新入生とコミュニケーションを取ることで、新入生の不安を解消し、ピアサポーターとなる在在生にも経済的支援を行う制度です。

2022年度は、3名の在学生在がピアサポーターとして活躍しました。

2022年度ピアサポーター活動報告

博士課程前期2年の課程 2年次

シータクーン スティーラーさん
陸小曼 (リク ショウマン) さん
劉晨皓 (リュウ シンコウ) さん

この数年、コロナ禍でみんなの学生生活は大きく変化しました。大学での授業がオンラインで行われるようになったり、運動会や文化祭などの大切なイベントが中止になったり、内容が縮小されたりして、学生同士のコミュニケーションが取りづらいという課題が生じています。

このような状況で、我々の国際文化研究科は学生同士が交流を深めるためのイベントの一つとして学生懇親会を設けています。オンラインの制限があるにも関わらず、懇親会は異なるバックグラウンドを持つ学生同士が交流する機会であり、新しい友人を作ることもできますし、また、学生生活の中でも特別な思い出の一つとして残ります。同級生や友人たちと楽しい時間を過ごすことで、大学生活を充実させることができます。

ピアサポーターのメンバーとして、我々は懇親会の計画と実施に力を注ぎました。コロナ禍により対面で開催するのが難しかったため、懇親会は2回ともオンラインとなっています。計画の段階では、我々は懇親会の対象者、開催時間、流れ、各自の役割などについて細かいところまで何度も話し合いました。オンラインでも盛り上がるように、我々は様々な工夫をしました。まず、アイスブレイクで緊張を解きほぐして話しやすい雰囲気と、お互いのことを知る機会を作るように心がけていました。そして、場の雰囲気を一層明るく盛り上げるため、参加者たちの希望順で決まったゲームをやることにしました。最後に、参加者たちが抱えている悩みや関心を持っている話題について、先輩なりに意見を与えたり、情報を共有したりするセッションを設けていました。以上は懇親会の大体の計画でした。

開催前日にきちんとリハーサルを行ったため、第2回の懇親会はミスが何一つもなく無事に実施しました。

「研究科の学生同士が勉強以外の話ができる・言語や文化の交流ができる『場』をつくりたい」という思いで、今回も前回と同じような形で、オンラインボードゲーム

会と交流会を開催しました。イベントの流れとしては、アイスブレイク、ゲーム、交流会という構成でした。アイスブレイク活動には、参加者に事前に2枚の自己紹介のパワポを準備してもらい、当日に自己紹介をしてもらいました。1枚目は普通の自己紹介ですが、印象に残った人間関係を作るため、2枚目は参加者に自分の本当の特徴を3つ、嘘の特徴を1つ入れてもらい、他の参加者に当ててもらう真偽ゲームをしました。このゲームで、普通聞き流される自己紹介は面白くなって、みんなも興味津々でゲームをしていて気付かないうちに他の方を覚えました。その次、ボードゲームセッションには、「タブー」というボードゲームを導入しました。第2回では、英語コース(IGPLS)の学生も何人か参加してくれていましたので、日本語と英語両方を使って進行してみました。英語での説明や進行役は難しかったが、日英両言語も得意の方の助けで順調にやりました。今回のゲームの内容は、使用禁止の4つの関連語彙を使わずに、与えられたキーワードを口頭で説明して、他の参加者に当ててもらうというゲームでした。最初簡単すぎたと思った方は何人もいますが、やってみると意外に難しく、勘違いが何度も起こってみんな大笑いしていました。ボードゲームの後、Q&Aとフリートークセッション(話題を設けず、場の流れに任せて自由に話をしてもらう)を行いました。

当日は、将来の進路や、趣味が同じ人同士のコミュニケーションとか(例:ホラー映画好きや、サッカー鑑賞好き)、美味しい店など、仙台・東北大での生活に関する情報を交換する機会となりました。時間のため途中で話を切りましたが、新しい友達になる方はこれからも仲良くしていくと思います。最後に、顔を合わせることができないですが、みんなは無敵な笑顔をカメラに出して、素晴らしいスクリーンショットを撮りました。

この度、参加者の方が色々な体験をできて、友達も作れたと思いました。それから、我々はピアサポーターの仕事で企画、コミュニケーションと問題解決など、多角の能力を鍛えることができました。何らかのイベントを自ら企画・開催するのが初めてなので、こんなに大成功させるとは思わなかったです。参加者の皆さんが楽しんでいる様子を見てすごい達成感を感じました。また、懇親会のおかげで、我々は他国出身の方々とコミュニケーションをとって違う文化に触れることもできました。異文化交流を通して、我々は多様な価値観を持つ留学生と意見交換したり、相互理解を深めたりしました。この期間に体験できたことは一生忘れがたい良い思い出になりそうです。ピアサポーターを担当して本当によかったと思いました。



懇親会のスクリーンショット

2022年 学生生活調査アンケート 集計結果報告

鄭 嬌婷（応用言語研究講座准教授）

新型コロナウイルス感染症の拡大により、約 3 年間にわたり、生活の様々な面で制限を受けてきました。今は新型コロナウイルス感染症の終息が見え、マスク着用も個人の選択に委ねられることになりました。しかし、長期にわたる厳しい学生生活のため、生活、研究、就職において、多くの学生が悩みや不安を抱えていることが予想されます。学生進路指導委員会は、2022 年 9 月に、研究科内の学生が抱える悩みや不安、研究生活での問題点などを把握するためにアンケート調査を実施しました。調査結果を以下にまとめます。

【調査期間】

2022 年 9 月 17 日から 9 月 30 日まででした。日本語コースの在籍者 96 名のうち 55 名、英語コースの在籍者 32 名のうち 15 名が回答しました。

【調査結果】

生活面においては、感染症の不安が少なくなったものの、長期にわたるコロナ禍によるアルバイト減少などによる経済的な不安が最も多くの学生にとって現実的な問題であることがわかりました。そのため、研究科では奨学金や RA、TA などを活用したサポートの提供に加え、工夫を重ねていくことを検討しています。

研究活動に関しては、自宅での研究活動や研究資料のアクセスの困難さ、学生同士のコミュニケーション不足などが課題として浮上しています。しかし、昨年に比べて対面の講義が増え、学生や先生とのコミュニケーションの機会が増えたことから、不安を感じる程度は減少しました。

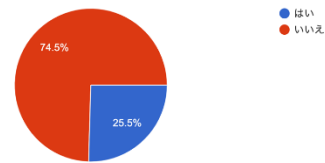
就職活動に関しては、情報収集の難しさや研究科レベルの支援の必要性などが課題として挙げられました。

研究科に対する要望として、以下が挙げられました。学生寮の制度の見直し、書類提出が簡易に行えるシステムの導入、対面研究会の開催、母語話者でない学生に対する英語や日本語論文の執筆支援、就職活動支援、業界との交流の場の提供などです。

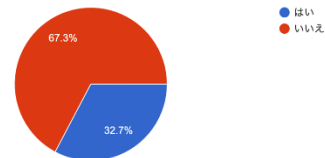
当研究科では、今後も生活面や心理面において、より一層のサポートを充実させ、教育や研究活動に安心して取り組むことができるよう、最大限の対策を引き続き推進してまいります。

生活面での不安

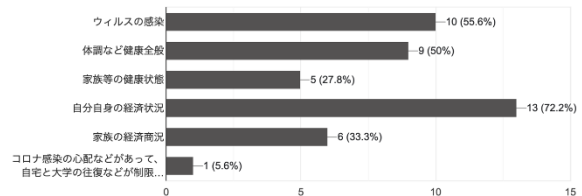
Q7. 昨年 (あるいは 前期) と比べて、現在の生活状況は変わりましたか？
55 件の回答



Q9 現在、生活面での問題や不安はありますか？
55 件の回答

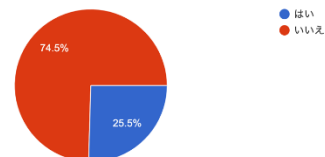


Q10.
Q9で「はい」と答えた方にお尋ねします。どのよ...の問題や不安を感じていますか？（複数回答可）
18 件の回答

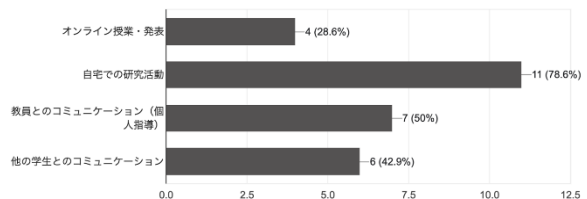


授業・研究活動面での不安

Q13. 現在、授業・研究活動面での問題や不安はありますか？
55 件の回答

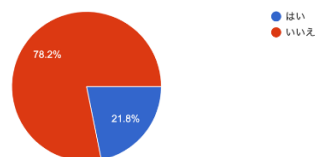


Q14.
Q13で「はい」と答えた方にお尋ねします。どの...面で問題・不安を感じていますか？（複数回答可）
14 件の回答



就職活動での不安

Q17. 就職活動で問題や不安はありますか？
55 件の回答



「アルムニひろば」同窓生のコラム

Diego Dardon (ディエゴ ダードン)

(Graduated from the International Graduate Program in Language Sciences (IGPLS) in September, 2022)



I received both my Master's and Doctoral degrees in the International Graduate Program in Language Sciences at GSICS, Tohoku University. My research interest lies at the interdisciplinary field of language learning and human brain science. Specifically, my research focuses on investigating cognitive individual differences and neural mechanisms during learning typologically diverse language structures using behavioral and fMRI techniques.

Thanks to the help and support from my advisors and friends in GSICS, I have had a wonderful experience in Japan as an international student and researcher during the past five years. Although the pandemic thwarted most of my time as a doctoral student, I still learned gained much knowledge in learning to do research and the tools to do good research. In particular, I felt my understanding of linguistics, statistical analysis, and fMRI data imaging increased exponentially due to the help of my supervisor, professors, and my lab mates. I was lucky for all their help and feedback in order to become a much better researcher as well as their encouragement to keep a positive attitude. In particular, my supervisor always supported me to continue pursuing this interdisciplinary research of language and brain sciences reminding me that it takes time to grow as a researcher. Whenever I encountered difficulties, these encouraging words always helped me along the way. During my studies at GSICS, the Language Sciences program frequently invited world-renowned researchers from different fields to present online the latest cutting-edge research from their respective fields. These informative and insightful presentations not only broadened my perspective about disciplinary research but also helped me gain new knowledge that I could apply to my own research. I am very grateful to my supervisor, professors, and lab mates for all their support and stimulating discussions. Currently, I am working as a postdoc at GSICS, and I look forward growing as a researcher, and I hope to enter my next career as a model representative of GSICS. I sincerely recommend this program for international studies to help broaden your perspectives and enhance your careers!

薛 曉蒙 (セツ ギョウモウ)

(2022年3月 アジア・アフリカ研究講座)

博士課程前期2年の課程修了)



2022年3月にアジア・アフリカ研究講座博士前期課程を修了した薛曉蒙と申します。2019年9月、私は研究生として来日し、国際文化研究科に入学しました。翌年、院生になりました。研究科の先生方と研究室の皆様のおかげで、充実した二年半を過ごしました。

2022年5月から中国の電機メーカーで、日本市場向けの海外営業として働いています。

博士前期課程に在籍した時、私は魯迅の『傷逝』と夏目漱石の『それから』に表れた女性観・恋愛観を比較研究しました。私は両作品に表れた女性観・恋愛観を比較考察し、これにより両者の類似点と相違点を明瞭化し、両者の女性観・恋愛観を、形成過程をも含めて多角的に分析しました。

私が希求するのは文学研究のみならず、比較手法や、異文化理解のための分野横断的な視点を学び、より独創的な研究を推進し、国際的な視野がある人になりたいです。

また、専門授業では、異文化理解、異文化コミュニケーション、外国語、地域研究などを勉強し、異文化に対する理解が深まり、言語力も高まりました。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、授業とゼミはオンラインになりました。しかし、先生方から熱心なご指導を受け、ゼミの皆様から多角的なコメントをもらうことができて、非常に有意義な二年半を過ごしました。心より感謝いたします。

修了後、私は帰国し、中国の電機メーカーに入社しました。先進技術を通じて、持続可能な社会の実現に貢献し、より多くの人々を幸せにしたいと考えているからです。そして、世界を舞台に働きたいと思い、海外営業職に就きました。今は日本市場に向けて、白物家電を販売し、人々の暮らしの快適空間づくりに貢献しています。

海外営業の仕事では、言語力はもちろん、担当する国の文化と習慣への理解も必要です。留学生活で身についた異文化理解のための国際的な視野と言語力を活かすことができて、非常によかったです。また、研究生活では、多様な考え方に柔軟に対応すること、失敗を恐れず積極的にチャレンジすることを学びました。海外営業として新米であるが、前向きに挑戦し続けています。コロナ対策がだいぶ緩和され、海外出張ができるようになりました。初めての海外出張を楽しみにしています。

仕事で疲れた時、よく大学院での生活を思い出しました。先生方と皆様の言葉と笑顔、研究室の皆様と一緒に食べた芋煮、川内キャンパスに積もった白雪など、私にとって非常に励みになります。先生方と皆様、心から感謝を申し上げます。

事務局より

①メールアドレスの届出についてのお願い

国際文化研究科は 2023 年度創設 30 周年を迎えます。この期に合わせて、同窓生・修了生の皆様の名簿を更新・整備したいと考えています。社会でご活躍されている皆様との繋がりを維持・強化し、研究科から皆様への情報発信を充実したものにしたいと考えております。

つきましては、同窓会ホームページに掲載している届出用フォームより、皆様の連絡先（メールアドレス）等の情報をご提供いただきますようお願い申し上げます。いただきました情報は、本学および本研究科同窓会関連の連絡や修了生向けの連絡に使用し、その他の用途に用いず、適正に管理することを申し添えます。

皆様のご協力を何卒お願い申し上げます

②会費納入・「国際文化研究科教育研究支援基金」ご協力のお願い

○会則 12 条に基づき会員の皆様に会費等の納入をお願いいたします。

第 1 2 条 学生会員は、入学時及び進学時に入会金及び会費を次のとおり納入するものとする。

2 入会金は 2, 0 0 0 円とし、初めて学生会員となったとき 1 回に限り納入する。

3 会費は、次のとおりとする。

(1) 国際文化研究科前期課程の学生 2, 0 0 0 円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生 3, 0 0 0 円

会費は郵便局からお振り込みください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-66621

○上記以外の方（修了生、在学生、現教職員・元教職員などの皆様）には、**国際文化研究科 教育研究支援基金**へのご支援をいただければ幸いです。

<国際文化研究科 教育研究支援基金>

https://www.kikin.tohoku.ac.jp/project/support_the_department/GSICS



郵便振替・銀行振込のほか、クレジットカード決済
コンビニ決済も可能です。

③国際文化研究科 30 周年記念行事への参画について

国際文化研究科は、令和 5（2023）年 4 月に創立 30 周年を迎えます。研究科は、これまでの歩みを振り返り、力強く次の 10 年に歩み出すために、記念事業を開催することを決め、その準備と実施を検討する委員会を立ち上げました。委員会では、30 周年の記念事業を、同窓生と現役生の繋がりを強め、同窓会組織をより堅固にするものと位置付けています。

今後、同窓会ウェブサイトやメールなどを通じて同窓生の皆様に関連する情報を発信していきますので、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

④西棟 改修工事について

研究科の念願であった国際文化研究科西棟の改修が国に認められました。令和 5（2023）年夏頃から改修工事が始まり、翌令和 6（2024）年度の開始時期にはリニューアルした西棟がお披露目される予定です。

上述の 30 周年記念事業では改修後の西棟を同窓生の皆様にも紹介したいと考えています。そのため記念事業を令和 6（2024）年度中に開催することを計画しています。

国際文化研究科同窓会事務局

int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp

国際文化研究科同窓会ホームページ

<https://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/>